

## やってみたい研究についてのレポート

学生番号：

氏名：

### 1. はじめに

タスク1-1においては、複数の「やってみたい研究」を提示したが、ここでは、その中でも一番取り組みたいと思っている「学習継続を可能にする事前テストの活用法に関する研究」（タスク1-1提出時タイトル）を対象とする。

### 2. 「やってみたい研究」書き直し

#### 研究テーマ 「事前テストの持つ先行オーガナイザー効果に関する研究」

有意味受容学習理論に基づく先行オーガナイザーは、学習内容の理解を促すために予め示す学習内容を表す抽象的・一般的情報のことである。たとえば、「この章の学習目標」などを最初に提示するのもこれにあたり、既有知識を呼び出したり、知識構造を整理したりして見通しを良くする。

しかし、具体的にどの教材に何を先行オーガナイザーとして与えれば効果的かは明確にされていないのが現状であり、いくつかの実証研究が行われてきた。（例えば、池田ら(1985)）

そこで、本研究では、先行オーガナイザーとして何が効果的かということ、学習者自身が「事前テスト」を受けることによって、間違えたところ、分からなかったところを自ら認知することで、個々に適した先行オーガナイザー効果が生まれるという仮説を立て、実証実験によってそれを証明しようとするものである。

なお、本研究は鈴木(1989)が「授業設計に関する研究の最も基礎的な単位として挙げられる」とする教授方略の研究であり、その重要性については、ガニェ(1986)において「現在においてもこのタイプの基本的研究の重要性は変わらない。一つの学習目標を扱う授業の構成を最適化するためのマイクロ設計のレベルでの研究課題としては、先行オーガナイザー等の「情報提示前の処遇」の処方、(後略)」と指摘されるとおりである。

なお、研究にあたっては、「教授方略に関する研究を行ったり研究成果をまとめる際には、理論的根拠を的確に押さえ、ある教授方略が効果的である条件を明らかにすることが肝要である。」(鈴木 1989)という点に留意しながら進めることになると思われる。すなわち、文献研究によって仮説の有効性を理論付けた上での実証実験になるものと考えられる。

#### 【参考文献】

池田進一・田中敏(1985)「先行オーガナイザー研究における実験図式の改善」『読書科学』Vol. 29 No. 2, pp. 41-55

鈴木克明(1989)「米国における授業設計モデル研究の動向」『日本教育工学雑誌』13(1), 1-14

#### 【先行研究等】

以下の文献については、重要参考文献として評価法の検討時に参考になることを期待している。

広田忍(1983)「D. P. Ausubel の教授方略とその論理：「先行オーガナイザ」を中心に」富山大学教育学部紀要. A, 文科系 31, pp. 77-87.

篠ヶ谷圭太(2008)「予習が授業理解に与える影響とそのプロセスの検討：学習観の個人差に注目して」教育心理学研究 56-2, pp. 256-267.

**抄録：**

本研究では、事前に教科書を読むという予習が授業理解に与える影響とその個人差について、中学2年生を対象とした歴史授業を用いて実験的に検討した。また、予習の効果の授業内プロセスについて検討を行うため、ノートやメモなどの授業中の学習方略に注目した。さらに本研究では、予習が授業への興味に与える影響や、予習時の質問生成の効果についても併せて検討した。予習群、質問生成予習群、復習群を設定した実験授業を行い、予習-復習、質問生成あり-なしの対比を用いて検定を行った結果、予習は歴史の背景因果の理解に効果を持つことが示された。ただし、学習観を個人差変数とした適性処遇交互作用(ATI)の検討の結果、そのような予習の効果は学習者の意味理解志向の高さによって異なることが明らかになった。また、学習方略に注目した授業内プロセスの検討の結果、予習が授業理解に与える影響とその個人差は授業中のメモを媒介して生起することが示された。さらに本研究では、予習は授業への興味を下げないことや、予習時の質問生成には効果が見られないことが示された。

**キーワード：**予習、学習観、学習方略、先行オーガナイザー、適性処遇交互作用

### 3. 自己分析

タスク1-1提出時に比べ、もっとも大きく変化したのは、自分なりに絞り込んだと思っていたテーマに対して、より一層絞り込むことができたということであると思われる。それは「学習継続を可能にする事前テストの活用法に関する研究」という漠然とした書き表し方しかできなかったテーマを、「事前テストの持つ先行オーガナイザー効果に関する研究」へと深化することができたことから理解できる。

また、内容面についても、「こんなことをしたい」という頭の中に浮かんでいるだけのものを、「研究」として捉えなおして、現時点ではまだまだ不十分と認識しながらも、先行研究や評価方法、学術的価値の検討などを行い、「やってみたい」に加えて「やる価値がありそう」という感覚を持つことができたことも大きな収穫であったと思われる。

そして、タスクにてさまざまな作業を行う中から、「研究というのは、やっぱり大変な作業なんだ…」ということと、計画の重要性を実感することになったのも学びの成果であろう。頭で分かっていたことを実感を伴う理解として学ぶことができたことで、来年度の研究活動に対する新たな動機づけになったと同時に、「できるだけ早く研究方針を確立することを目指す」という一つの目標ができた。

ブロック1の学習によって、自分なりには、そこそこに「研究者らしく」なったのではないかと感じているが、ここでの学びを特別研究Iの最終成果物である研究計画書に生かせるようにしたい。

## (参考) タスク 1-1 提出内容

### ■学習継続を可能にする事前テストの活用法に関する研究

今のところ、一番やってみたいというのがこのネタです。

事前テストはその科目を受講するにあたって、受講の必要性を判断するためという機能がありますが、これを学習活動の一部に組み入れて、学習を効果的にしようというものです。

具体的には、また正確に言うと事前テストではなく、章末にある確認テストを頭にも持ってくるというものです。最初にこの確認テスト(言い方は別として)をし、その後、コンテンツによる学習を行います。

この学習活動のなかで、最初にやった確認テストで間違えたところや、意味すら分からなかったところにさしかかったとき、人は「これを間違えたんだよな」とか「なるほど、そういうことだったのか」というようになると思います。「人は間違いを基準にして学ぶ」というような事も何処かに書かれていたように思いますが、最初に自分の弱点や分からないところを自分の内で自然と意識させることによって、章のはじめにでてくる「この章の学習目標」といった、与えられる目標とは別に、それぞれの現状にあった自分の目標が無意識のうちにもてるのではないか…ということです。

そして、章末でも同じ確認テストを行います。当然、最初にやったときより良い結果になるはずですが、最初の確認テストは、よく分からず、自分の経験やその時点での知識に頼って解答しており、ろくな結果にはならないはずですが、それを学習後にも同じ問題で行うと、大抵は結果は良くなっていると思われれます。その結果、「おっ、俺できるようになったじゃん」という意識、つまり自分が学習した(努力した)結果、できるようになったという実感が生まれます。これが、学習の継続を促すものと期待しています。